

アジア・太平洋研究センター主催シンポジウム

日 時：2019年2月23日（土）

場 所：R棟4階 R42会議室

テーマ：近代における日本人のアジア認識

報告者：藤谷 浩悦（前・東京女学館大学教授）

田中 比呂志（東京学芸大学教授）

関 智英（東洋文庫奨励研究員）

司 会：宮原 佳昭（南山大学准教授）

近代の日本人はアジアのことをどのように認識してきたのか。この問いに答えるため、これまでさまざまな角度から研究が進められてきた。アジアは単一の文化を共有した自明の纏まりではなく、多様な主体が競合、対立、妥協しながら繋がり合い、交流を深めてきた。そして、中国は現在、このアジアのみならず、世界で存在感を強めつつある。「中国認識研究会」は、このような事情を前にしながら、日本人のアジア認識の分析を通じて、アジア、特に中国と日本の関係を考えようとして設立されたものである。この間、同研究会のメンバーは、藤谷浩悦氏の『井上雅二と秀の青春（一八九四—一九〇三）—明治時代のアジア主義と女子教育—』（集広舎、2019年2月）など、日本人のアジア認識に関する多数の論考を発表して来た。本シンポジウムでは、中国認識研究会の藤谷氏、田中比呂志氏、関智英氏が、近代における日本人のアジア認識に関する最新の研究内容を講演し、その後、来場者との質疑応答を交えて総合討論を行った。

1898年という分岐点 —アジアと太平洋—

藤谷 浩悦

本報告は、1898年の米西戦争が日清戦争後の日本に与えた影響について、朝日新聞社記者・長沢別天の社説「太平洋に於ける日米」を中心に考え、あわせて日本とアジア及び太平洋の関係を論じた。

1897年10月以降、東アジアの政治情勢は激動した。これらの政治情勢は、太平洋上の政治変動とも連動していた。米西戦争は、1898年2月のアメリカの軍艦メイン号の撃沈に端を発し、キューバの独立運動を契機とする戦争が、遙か太平洋を渡り、フィリピンへと波及したものである。これより先、アメリカは1869年に大陸横断鉄道を完成させ、東西両岸を繋げると、一気に太平洋への進出を図り、1870年代の南

太平洋のサモアをめぐるドイツとの覇権争いをへて、ハワイに触手を伸ばした。ハワイの白人有力者たちは1893年1月に暫定政府を樹立し、女王リリウオカラニをイオラニ宮殿に幽閉して、翌1894年7月にハワイ共和国を樹立した。アメリカは1898年4月21日、スペインに宣戦を布告すると、8月にはマニラ湾を占領し、開戦4ヵ月で圧倒的な勝利を収めた。そして、アメリカの連邦議会は1898年の米西戦争を契機にハワイの併合を承認した。また、米西戦争の結果、1898年12月のパリ講和条約で、フィリピン諸島はプエルトリコ、グアムと共にアメリカに割譲された。アメリカのフィリピン領有は、アメリカの東アジアの政治情勢への参入という新しい局面を世界に示した。

1897年11月14日、ドイツ軍艦が山東省における宣教師殺害事件を契機に膠州湾を占領した。翌1898年3月、ドイツは膠州湾を、ロシアは旅順・大連を租借地とすると、イギリスは香港の九龍半島、威海衛を租借地に、またフランスは広州湾を租借地として、列国の中国における利権競争が加速した。このため、日本の言論人の多くは中国の政治情勢、特に列国の利権競争に関心を集中させた。かかる中で、長沢別天は1898年8月31日、『大阪朝日新聞』に論説「太平洋に於ける日米」を発表し、日本人の米西戦争に対する注意を喚起し、将来の日本とアメリカの衝突を予言すると共に、この回避策として「通商」の充実を説いた。長沢別天の論説は、アメリカの日本に対する太平洋上の脅威を力説した点で、異色である。長沢別天は1891年11月10日に日本を出てアメリカのスタンフォード大学に留学し、1893年にハワイをへて帰国すると、同年末に『ヤンキー』を刊行し、アメリカの物質的膨張力及び精神的成長力、進取の気性、更に貧富の格差を注視し、社会主義に関心を寄せると共に、日本の未来に警鐘を鳴らした。長沢別天にすれば、アメリカのフィリピン領有は、アメリカが大陸横断鉄道を完成させると共に、拡張の矛先を大西洋から太平洋に移し、サモア、ハワイを経て、東アジアへと西漸運動を進める際の必然的な出来事に他ならなかった。

明治維新以降の日本人の太平洋に対する関心は、古いものではない。稲垣満次郎は1891年に『東方策』第2編を、1892年に『東方策結論草案』を出版し、20世紀を「太平洋の時代」と捉え、環太平洋的な構想を打ち出していた。しかし、多くの日本人の関心は、太平洋よりも、むしろ大陸の方に向けられた。この理由は一、日本の脅威の対象が中国やロシアなど、常に西側に存在したこと、二、アメリカが国内政治に謀殺されていたこと、三、太平洋上に資源などの大きな利権が存在しなかったこと、以上の三点に求めることができる。この点で、長沢別天の「太平洋に於ける日米」は、1898年の米西戦争にアメリカのアジア政策の真髄を見て、日本人に太平洋上でのアメリカの脅威を訴えた点で、また将来の日本とアメリカの衝突を早期に予見し、回避策を出した点で、記念碑的な論説となった。長沢別天の優れた点は、東アジアの

政治情勢と太平洋上の政治変動の連動性に気づき、かつ日本の立国の基を通商に考えて太平洋の重要性を説き、更に日本人のアメリカに対する注意を喚起した点にある。しかし、長沢別天が1899年末に結核で病没し、言論活動も短かったことから、今日においては文芸批評家として以外、名前が殆ど忘れ去られてしまったのである。

日本人の同時代中国認識 一字治田直義を中心として一

田中 比呂志

水野梅暁とともに『支那時報』を創刊した人物の一人が宇治田直義である。『支那時報』の創刊以来、宇治田は編集・発行人を務めるとともに、署名記事をも書いている。宇治田は1894年3月、大阪市に生まれ、1915年6月、東亜同文書院政治科に第13期生として入学、上海に渡航した。卒業後には院長の根津一を慕って東亜同文書院職員として就職し、その後いったん大阪新報社外報部の記者となった。「支那問題の研究」を志したからである。その後、彼は東亜同文書院に戻り、教授兼学生監を勤めた。

1920年6月、宇治田は外務省囑託となって東方通信社調査部次長となる。この時の部長が水野梅暁であり、これが2人の最初の出会いであった。ところが水野は内部対立を契機として1923年12月、東方通信社を退社してしまい、宇治田も水野と行動を共にして退社することになった。そして水野が『支那時報』を創刊・発行することになった際に、院長の根津の勧めもあり宇治田がこれに加わることになったのである。

宇治田はこれに先立ち1921年10月、日本評論社から著書『共和以後』を出版し、また1924年3月には外交時報社に入社し、間もなく『外交時報』編集長に就任し、かつ『外交時報』に「支那問題」に関する文章をも発表している。これらは「支那問題の研究」の具体的成果とすることができよう。これらがちょうど『支那時報』発刊の時期と重なることもあり、この時期の宇治田の中国認識を検討することは、『支那時報』の記事の検討にも有益であると考えられる。そこで、これらの文章を手がかりとして、宇治田が同時代の中国をどのように見ていたのか、考察してみたい。

宇治田の基本的スタンスは「従来の我が国人に依って為された支那研究…表面に現れたる政争、乃至、個々の経済事情その他に偏するもののみ」であるため「真に支那を知る為には、必ずや支那百般の事象の由って来る根源に就いて極めねばならぬ。其の根源とは、云ふ迄もなく思想である」というものであった。

では、彼の同時代史的中国理解は、現在の日本人の中国近代史理解と比べて、如何なる異同があるのだろうか。たとえば辛亥革命については、「滅満興漢」なる人種差

別思想に根底を有つ…純真なる民主的革命思想に至っては、量に於いても、質に於いても、極めて希薄、第一革命以来今日に至る十年間は寧日なし」と、革命が純真なる革命思想に基づいたものではなく、しかも人種差別であり、混乱の始まりであるという認識を持っていた。そして十年間の混乱が生じた原因は何であるかについて、宇治田は中央政府の樹立のみに力を尽くし地方省問題を等閑に付した結果、清朝時代の統治の伝統をふまえず中央集権化したことにより「地方人民は政府の統治に対して没趣味」化し、中央と地方との乖離を生んでしまったとする。このような見解から、彼が注目したのが「自治運動は現代支那の革正に資する有力な手段である」と位置づける聯省自治運動であった。宇治田は聯省自治運動に関しては、「どこまでも支那国民の自覚により改善されるべき」であり、「自治運動が支那民衆の自覚によるものであり、支那の新運命に向かって進みつつあることを是認する」と述べ、あくまでも民衆の意志、自発性、すなわち、中国の内在的勢力に期待するのであった。とはいえ宇治田は聯省自治運動の成否は「国内の統一、内乱の終息が一切の前提」であるとする。というのも「支那人民の民度のため、自治運動により軍閥が倒されてもまた次の軍閥が現れ、自治運動は前途遼遠、自力で統一を完成させることは目下の所十分見込みありとは言うことができない」という見解に基づくものであった。

最後に、宇治田は日本の立ち位置についてどのように考えていたのであろうか。宇治田は「幣原外交、我が国朝野の輿論はいずれも対支干渉に反対」であるとし、「絶対不干渉」こそが日本の取るべき姿勢だとする。だが、一方で奉直戦争の拡大が日本の干渉を呼び起こす可能性があるとは指摘し、憂慮を表したのであった。

「支那通」概念の一考察

関 智英

近代の日中関係を語る文脈でしばしば目にする支那通なる言葉（以下「支那通」）。では支那通とは何か。管見の限り最も早く学術的な問題関心から支那通に検討を加えた三石善吉の分析は、支那通に一步深い考察を試みたものと言える。三石は次のように支那通を説明している。一つ目は次の説明である。

「シナ通」は中国との交通が繁くなり、在華邦人が漸次増大するところに発生した。「シナ」事情に詳しく「シナ」語をよくするところからその発生時においては「通」として重宝がられたが、その視野の狭さ、ジャーナリズムの発達等々によってその価値を減じ、今次大戦の末期・昭和十七年には、ついに『一読支那通』（鈴木快城、牧書房）などという書物が出るに及んで“一読せる者すべて支那通”と行きつくところ

まで行きついた。「シナ通」の命運を知るべきであろう。

二つ目は、「元来，“シナ通”とは漢学者，あるいは，その発展形態であるシナ学者をさしたものだ」だったが，「日清戦争，義和団事件を経て，日本資本主義が〔中略〕「脱亜」の方向を明確にたどるようになると，ここに新たな“シナ通”が要求され〔中略〕日本人の中国への関心が高まるなかで，宮崎滔天，平山周，内田良平などいわゆる大陸浪人，“シナ通”が排出し〔中略〕要するに，いわゆる“シナ通”は中国侵略の過程で生み出された奇形児」であったとする。同様の定義は，他の研究者も試み，三石の解釈を発展させ支那通を「硬派」と「軟派」に分類するものもある。ただ，以上の定義では軍人・外交官やジャーナリストの支那通が漏れてしまい，支那通全体を定義できていない。

もちろん「支那通」という概念が漠然としたものである以上，正確な定義は難しいが，2つの方法で「支那通」イメージへの接近は可能である。1つは近代日本でどのような人々が支那通とされてきたのかを検討すること，2つには，同じく近代日本で「支那通」がどのような文脈に登場していたのか，という点に着目することである。本報告では後者の方法から「支那通」イメージの接近を試みた。

その結果，大きく次の5点の結論を得た。1. 「支那通」は19世紀最末期から用例が確認され，1910年頃から盛んに使われるようになった。2. 「清国通」や「支那通」は，当初は軍人や外交官を説明する際にも多く使われ，荒尾精を「支那通の元祖」とするような説明の仕方は少し後の時代から登場したと考えられる。3. 「支那通」はそれ自体では存在せず，何らかの属性に付着してはじめて具体的意味を持つ。4. 支那通に対する批判は，「支那通」登場時から存在し，それは20世紀前半を通して様々な文脈で繰り返し語られた。5. 日本の中国認識・対中政策の欠陥が，「支那通」を用いて説明されていたことを考えると，「支那通」は通時的に日本の中国認識の至らなさを象徴する言葉として存在し続けた。

（文責：宮原 佳昭）